

黒潮の民俗誌

46年6月22日放送 秋田県男鹿市での講演

● 宇田道隆 (東海大教授)

海流の影響

私は大学を出まして四十四年間、これまで海のほうの研究にも従ってまいりました。そのなかでも主として、水産関係に多く働いてまいりましたのでございます。

きょうは、特に、黒潮と水産の関係を中心にそれからこのごろたいへんやかましくなっております。海洋開発と海洋汚染の問題、いわゆる公害といったことにもふれてみたいと思っておりますのでございます。

ちようどいまごろは、梅雨に入ります。海のほうは非常に魚の動きの激しい時期でございます。大体南から北のほうへ魚が北上してくる時期でございます。特に日本海側では、対馬暖流に乗って動

いてくる魚、イワシ、アジ、サバ、マグロ類、イカ、サンマ、少し時期が過ぎましたがマスとか、いろいろな魚種が少しずつずれて、適温といえますか、よい場所を占めながら動いてまいっております。

太平洋側では黒潮(豊流)に乗って、魚がどんどん北上しております。新聞紙上でもほうぼうでめずらしい魚があるというところが、ちようど伝えられておる時期でございます。海洋気象という目から見ましても、冬の状態を脱してだんだん夏に移ってまいりまして、ことに冷めた水のあります日本海でいえば、北朝鮮の沖を流れる北朝鮮寒流、あるいは沿海州のほうの寒流、またリマン寒流と申すような冷めた水が、日本海の半ば以上を占めておるのでございますが、そこに南から暖かい空気が入ってきてまして、いわゆ

るガス(濃霧)がたいへん多くなる時期です。

太平洋側でも、北から南に流れている親潮(寒流)に暖かい空気が流れて、濃霧の世界をつくっております。オホーシク海、ベーリング海、アリューシャン、千島の沿海は特にそういう時期でございます。ソウダラ、その他の魚の非常に活発な時期で、北のほうの漁業は特に活発になっておる時期です。この魚の動きとともに日本の人たちの生活に昔から大きな影響を与えてきたものが、海流で、特に暖流の影響というものはたいへんに大きいものであります。大昔のことを跡づけするのは、そう容易ではありませんが、残っておりますものから風俗、品物、人間そのものの性格、そして日本民族はどこから移住してきたかというような問題は海流と大

いに関係があると思っております。

漁民の系譜

亡くなられましたが、日本の民俗学を始めた柳田国男先生の「海上の道」という本がありますが、それにも、イネを持ってきたのは南からで、特に東南アジア方面を中心に考えておられるようであります。

一度そういう座談会が開かれました、私も海流関係をやっているのでその席に出ました。柳田先生のほかに農業のほうでは寺尾先生とか、いろいろな方がお出になっておりましたが、北九州あたりで見つかった非常に古い日本のお米などを中心に、いろいろお話があって、イネを持ってきた人はたいへん黒潮と関係があらって、一種の漂流のような形で九州のほ

特に日本海側では、対馬暖流に乗って動

魚が北上してくる時期でございませう。めておるのでございませうが、そこに南から暖かい空気が入ってきまして、いわゆる

の性格、そして日本民族はどこから移住してきたかというような問題は海流と大

持ってきた人はたいへん黒潮と関係があつて、一種の漂流のような形で九州のほ

うへやってきたというような推定をなさ

うことが何か出ておるのではなからう

ますと、非常に共通したものがございま

す。ニュージーランドのマオリは、広か

また、大陸のほうから、いろいろな人

がございませうが、迫力のある踊りでテ

つて行ったハワイの人たちと同じ仲間

がございませうが、非常に広か

たいへん関係しておいて、漂着というの

で見ますと、ああいう鬼の姿をしてい

る。やはり漂流民からきているのではな

かろうかと思つてございませう。

録に出ておるので見ますと、肅慎とか渤

海国からの使者が、日本に貢物を持って

きた時期がございませう。そのとき日本

国には、九州の大宰府に本店がありまし

て、九州の大宰府に本店がありまして、

そこへくるようにと言つてあるのに、船

が海流に押されてなかなか到達できない

で、敦賀とか若狭湾のほうへきたり能登

のほうへ漂着したりしたことが出ておる

のでございませう。

秋田のほうにも伝説として、「なまは

げ」というのがございませう。これは赤

鬼、青鬼のような姿で象徴されてお

りますが、冬の時期に見慣れない人が漂

流して海岸から上がったこと、何を

かあらわしているのではなからうか。

非常にそのときこわいと思つたような

印象が、伝承されているのではなからう

かというふうなことも考へておるので

ございませう。

これに似たことが、ほうほうにあるよ

うでございませう、大江山の酒類童子

のような、非常に体が大きく、酒をよく

飲み髪の色が赤いような人、これもやは

ピンを流して海流測定

海流と文化の動きというものが非常に

あると思われ、太平洋岸では釣り

針を持つてきた人は、太平洋岸では釣

り針を持つてきた人は、太平洋岸では

釣針を持つてきた人は、太平洋岸では

釣針を持つてきた人は、太平洋岸では

釣針を持つてきた人は、太平洋岸では

釣針を持つてきた人は、太平洋岸では

釣針を持つてきた人は、太平洋岸では

釣針を持つてきた人は、太平洋岸では

釣針を持つてきた人は、太平洋岸では

釣針を持つてきた人は、太平洋岸では

■サインひとつで
●便利になる
あなたの暮らし!

●あなたのサインで便利な支払い
富士ホームチェック
(個人小切手)

皆様の  富士銀行

くと、網走の海岸にたまたま来たものを拾ったという。椰子の実というのは南洋にあるものでございますから、それが海へ入って海流で、どういふ経路を経て北海道の網走まで来たかということ、非常に興味を持って、その経路を明らかにしてみたいということで、投入場所を書いた葉書をびんに入れ、拾った人にはその場所、時をちゃんと送り返してもらえばその経路がわかるから、これをやろうというので、水産調査会という会合が東京で開かれたときに申し出たのですが、びんのようなものを何本も大海に投じて、なかなかもどってきやしないだろう。そういうむだなことはやめたほうがいいと言って、反対する方がだいぶあったそうでございますけれども、いやそれはおもしろい、ひとつやらせてみようではないかと言って、大いに支持してくださる方もあって、とうとうそれをやることになった。

最初にその投入をしたのは日本海ではなく、太平洋側の千島の沿海でありまして、投入したものは二十本ほど拾われまして、千島の沖から三陸のほうへ、親潮寒流に乗って漂着したものです。

これはいへんおもしろいということになりました、その翌年から黒潮でも投入が始まり、それからだんだん盛んになったのですが、大正二年になりました和田雄治先生の計画に大阪毎日新聞の社長が、非常に共鳴しまして、私のほうで大

いに後援するから大々的にそれをやりましょうというところで、日本海を中心に太平洋側にもやりました、その当時は日本側とウラジオストクの間に航路がありまして、そこあたりにもぜひぶん投入しました。

一万三千本を投入し、約四千本くらいは漂着がございまして、それによってりっぱな海流図というものができたのでございます。

その後も盛んに海流びんによる調査というのには行なわれています。特に水産関係で熱心に行っています、私どもはその成果をずっと調べてみますと、流れも半島の付近は、たいへんよく寄るところであります。そういうところは実際に稚魚などが育ちやすい場所でありまして、岬の付近に渦巻きのような流れがあり、たいへんいい条件で、漁場としてもいいわけです。

そういう場所がほうほうにあります、びんを流してみると日本海は非常に拾われる率が多いのであります、多いときは五〇％、少ないときでも二〇％くらい拾われます。入口、出口が対島海峡、宗谷海峡、津軽海峡、間宮海峡で狭いところですが、なかのふところは非常に大きい。いちばん深いところは四〇〇メートル近くあるのですが、半分閉じられたような海です。それで標識放流といって魚に迷い子札のようなしるしをつ

テレビで初めての鐘乳洞セット

——「人ごしディレクター」がおくる夏の夜のお楽しみ

NHKテレビでは、こしも七月二六日から三週間にわたり銀河ドラマ(月一金・後9時)の時間で恒例のサスペンス・シリーズを開演。プロダクションは横溝正史作「ハルマ」の「墓村」(土屋隆夫(ハルマ)、堀内、パトリック・クエンティン(作「夏の終り」といずれも怪奇、ナゾとの興味をふんだんに盛り込んだ三作品をそろえて夏の夜をたのしんでいた)という趣向。

このシリーズでとくに話題のたねになるのは第一作の「ハルマ」の墓村のセットづくりで、テレビドラマではこれが初めての鐘乳洞がスタジオにつくられ、高さ三メートル余の洞穴のセットは、ゴムのマットの上に石けんのあわ状のプラスチックの化学剤を吹きつけて岩壁に仕立て、硬化プラスチックで作られた乳頭には、水にぬれている感じを出すため全体にや出しをかけるという手のこんだもの。さらに実際のビデオどりが始まると、スタッフが洞穴の中を駆けまわって水をまき、水滴がポタリポタリとしたたつて実感を出すしかけになっていく。

このセット、美術スタッフが奥多摩の日原鐘乳洞を参考にしてこしらえたものが、自然のままの迫力をまともに出すことしたら費用がかさんでやりきれない。そこで形のちがう鐘乳洞をいくつかつくり、これをキャスト(鉄製の事)の台にのせてうごかし、それをいろいろ組み合わせる変化をつけるなどソロバンの面でも苦心さん。制作担当の安江ディレクターは、これまでもつばら推理ものや時代劇を手がけ、人よんで「人ごしディレクター」の異名をもつご仁だが、美術担当の寺門チーフも「ゼロの焦窓」以来のコンビ。こんどの「ハルマ」も人間のodorodorとした怨念がテーマになっており、鐘乳洞はそのヤマ場の舞台になるだけに美術・照明、効果音、カメラアングルにわたって新しい工夫をこらしたという。この仕事のおかげでもう一つ「odorodorodorコンビ」の名をもらったご二人「はたしてどんな画面ができましたか、採点は視聴者にお任せします」と苦笑している。

*放送いんさいども

けてやりますが、太平洋岸よりも再びとれる回遊魚の数が多いんです。いままです、ブリ、イカ、スケソウダラなど、いろいろな魚でやりまして成功しているんです。

そのかわり、太平洋側のほうは何しろ広い海であり、しかも黒潮が必ずしも日本の沿岸へくるとばかりは限りません。むしろ、ずつと東の沖へ出てしまうんです。そしてアメリカ大陸のほうへ行ってしまう。

大体びんを流しても、かれこれ一年ぐらいいかかります。あるマグロ船が鯨子の近くで難破して、北米シアトル沖で見つけたときには、一年足らずでありますけれども、食糧が尽きて全部の方が白骨で見つかっております。また、別の船が伊豆沖で遭難して、メキシコの沖まで漂流しております。これも一年以上かかっております。

田雄治先生の計画に大阪毎日新聞の社長が、非常に共鳴しまして、私のほうで大

られたような海です。それで標識放流といって魚に迷い子札のようなしるしをつ

むしろ、ずっと東の沖へ出てしまいうんで、そしてアメリカ大陸のほうへ行つて

流しております。これも一年以上かかっております。

カナダの博物館の日本刀

それから、めずらしいことと思います。カナダのブリティッシュコロンビアにまいったときに、バンクーバー島という小さな島がありますが、その小さな博物館に行きましたら、百十年ほど前にインディアンが住んでいた時代に、地中から出てきたという日本刀が飾ってありました。非常にさびびっておりまして、それに説明がありました。

どういふ経路で日本刀が見つかったか、興味を持ったのでありますが、おそらく漂流した小舟に乗っておった方の刀を、手に入れたのではなからうかと、推察したのでございます。

毎年冬に、北米沿岸にガラス玉がたくさん着くんです。それは漁師の使われるウキです。大きいのはマグロの定置網で使います大きなガラス玉、小さいのはカニ網に使うガラス玉、いろいろな種類がありますが、特に大きいのを向こうの方は非常に珍重しておりまして、海岸の砂浜のところだと割れないで漂着している。それを集めて装飾に使っている。なかにはこれをたくさん集めて売っている店もございまして。非常にみんながほしがります。それに網などを配置しましてぶら下げたり、風見に使ったり。岩礁地帯だとこわれてしましますが、非常にたくさん漂着する年があり、また毎冬たくさん漂着し

ますが、これは黒潮の延長である太平洋流で、向こうへ漂着するのです。

アメリカも、イギリス人、スペイン人、フランス人などのヨーロッパ人が上がってくる前は、インディアンがおったわけですね。アメリカインディアンは蒙古系で、われわれと血のつながりの近い人々でありまして、いわゆる蒙古斑というおしりに青いところがあります。どういふ経路を経て彼らがアメリカ大陸に先住民として渡ったか。これは学会の一つの問題ですが、ベーリング海峡がまだつながっておったときとか、あるいはアリューシャン列島が一つの廊下のようにつながっていたときとか、いろいろいわれております。また、海流で漂流した人もあったのではなからうかと思われるのです。

ともかく、過去の遠い時期に、相当動いておったことは間違いないのでありまして、一千年ぐらい以前にポリネシアの人が大移動して、太平洋の島々に散らばり、ハワイ、タヒチ、サモア、さらに遠く離れたニューシランドまで、独特の航海法で帆をかけて、横に船がひっくり返らないようにカタマランというウキをつけまして渡っておる。それは百人ぐらい乗れるような、大きな船をつくっておりまして、そういうもので渡ったというんです。そのときすでに南十字星とか、北極星といった星を見たり、波の動き、流れ、鳥の飛び方を見て航海してい

るんです。こういうことから考えますと、日本文化の伝わってきたものというものが、相当古い弥生時代の前あたりから、幾つかの波に乗ってきたものであると思われれます。

魚族北上す

日本列島のほうにヒタヒタと寄せてきて今日の文化をつくり、また奈良時代には仏教とか、平安時代の初めには空海、最澄といった偉い坊さんがいます。その前の随、唐の時代に遣唐使とか遣唐使は、非常に風波の荒い時代に航海して、積極的に自分たちが伝えてきたものでなければ、その時代の航海にしても対島暖流とか黒潮の流れに乗ってうまく利用して、季節風にさらわらず、台風を避けて航海しています。

大陸から裏日本にくる場合、季節風が強いとたつた一日か二日で朝鮮半島のほうから、島根の日御碕のほうへくることのできるわけです。海流びんでもこれははっきり立証されておりまして、戦時には大陸から大豆とか物資を輸送することを、いかにだに乘せて実際にやり、成功しております。

それから南方から油とか砂糖などのいろいろな物資を内地に運ぼうというので、台湾あたりを基地にして黒潮に乗せたのでありますが、このときはシケが途中でじゃまをしまして、散らばって成功

電気料・水道料・ガス代・NHK受信料
でんわ料が自動的にお支払いできる

第一の家計預金

★第一銀行

未来のバンクをめざす

しませんでした。そういうものがなければ九州あたりへうまく着くことも可能だったわけだ。

こういうことからみて、われわれの持っている文化のものを築いた人々が、こういう流れと非常に関係があるということはいえると思うのでありまして、さらにこれを深く究めたいという気持ちがあるのであります。

早稲田大学の西村朝日太郎先生なんか非常に熱心に漁具の面からご研究になつておるのであります。

東北地方でも、さらにずっと南の九州方面にかけて、先住民のアイヌが住んでおいて、古い時代には蝦夷といふことばで呼ばれておりましたけれども、これがだんだん北へと退いて行った歴史があります。また南からきた人々と、非常に長い間戦いがあり、阿倍比羅夫の水軍が奥羽方面へ上がってきたとか、あるいは坂上田村麻呂の遠征とかいろいろありますが、遠い昔のそういうものをたどつても、なかなかおもしろいものがありました。

唐という名前のついた地名を見ますと西のほうから順々に移ってきております。それから魚の名前のついた地名が各地にごさいます。それを見るときたいへんおもしろいことに、昔おった魚族がだんだん北上してきておる。とれなくなつたということもございましょうが、太平洋岸でも同様なところがあります。

海洋汚染との関係

こういうお話をしているとたいへん長くなるんですが、いま申したことで非常に日本海のはらは汚染が多いということですが、これは海洋の汚染という問題にも関係があります。

いま浜田の沖合いあたりに、日本海の石油資源があるというので、アメリカ資本と共同で開発がすでに始まっています。エネルギー資源が今日の飛行機、自動車などの文化に、石油として大きな貢献をしておる。そしてまたそれが求められていくことをよく理解しますが、これがまた一面現在の大気汚染、海水汚染に関係しておるということですが、それを何とか防いでいきたいということから、世界的に大きな問題としてとり上げられておるのであります。大きな国際会議が幾つか開かれ、さらに来年にはスエーデンで、世界の条約を結ぶための人間環境の会議というのが開かれるのであります。

いま日本でも外務省その他で、盛んに準備をしております。いま東シナ海も油田が、台湾と九州島、五島のはらにかけて、二〇〇メートルぐらいの深さのところを中心に、非常に大きな油田があると推定されてきたのですが、さてこれを実際に開発するとなると、台湾、沖縄、中国のほうでも発言が

視聴率向上をめざすお役所番組

歌謡曲やドキュメンタリー、都は「都民参加」へ意欲

お役所番組といえは「かたい」が通じ相場でとかく敬遠されがちだったが、最近人気タレントを出演させたり、意欲的なフィルム・ドキュメンタリーを提供して評判をよぶ番組が登場してきた。

現在、民放テレビラジオにお役所番組を提供している主要政府機関は、三、年間予算総額約一六億円(民放連資料)のほか、電々公社(七億円)、国鉄(本社だけで三億八千円)があり、テレビラジオを合わせて約三〇本(うちテレビは予定を含めて一八本)のレギュラー番組を提供。東京にはもう一つ東京都という大スポンサーがあつて、広報室予算だけで年間三億円を計上、テレビのレギュラー七本、ラジオ三本のほか年に六本の特別番組を組み、さらに別予算で教育庁が二本、経済局が一本、中央市場が一本のそれぞれレギュラーを、議会局が年に数本(いずれもテレビ番組)を提供している。

役所の予算はいままでもなく税金でまかなわれ、ムダづかいが許されない。広報番組も「国民生活に役立たせる」のが目的だが、情報はならん時代の今日はただ「役に

*放送いんさいどめ

あり、韓国のはらでも一部発言があるというふうには、国際的なものがすでにございましておるのでございます。協定ができて、おりに始めにしまして、台風のようなの盛んに通るところであり、非常に流れが早い。黒潮は秒速二メートルぐらいの早さの水の動きがあるわけですが、シケのときにはこれはいへんな

大波を立てて一五メートル以上の高さの波もめずらしくはない。最高三〇メートルの波が、世界記録で観測されたものがありますが、それもかく、それに耐え得るよう設計がされなければならぬが、そういう経験がこれまでにないのであります。そういう事柄については慎重でなければならぬ。

岸でも同様なところがあります。

が、さてこれを実際に開発するとする
と、台湾、沖縄、中国のほうでも発言が

ルぐらいの早さの水の動きがあるわけ
ですが、シケのときにはこれはいへんな

ます。そういう事柄については慎重でな
ければならない。

もし油が流れ出ますと、東シナ海にア
ジ、サブ、ブリの大産卵場があり、イカ
も対馬から東シナ海にかけて大産卵場が
あるということが、最近明白になってき
ました。

そういう大産卵場が大きな被害を受け
るばかりでなく、流れが運んでくる油は
裏日本側は対馬暖流が運んで、沿岸全部
が汚染されます。これは大陸側へは行か
ないで、右へ右へと日本側の湾へみんな
入ってしまうので、ワカメとか、いろい
ろな計画養殖場、ノリなどがみんなだめ
になってしまいます。

太平洋側でも、内湾へ入り込む支流が
ありますのでいためられる。そういうこ
とに対して万全の措置をとらなければな
らないということがあります。

これは悪い場合を、いま予想して申し
上げたのでありますが、やはりいちばん
悪い場合を考えていなければならない。
たん白質というものが、これから非常

に大切な食糧である。それを水産がにな
うもので大切な仕事をしている。また黒
潮、対馬暖流が、それに大きな影響を与
えているものである。日本海は冬に海面
から非常に蒸発が起きます。大陸から
冷めた寒風が吹きますと、水温十度、
気温零度以下というような空気間に温
度差がある。お風呂屋のなかへ冷めたい
空気が入ると、猛烈に湯気が立つよう
に、日本海も湯気が立っているわけだ
す。その水蒸気が日本の脊梁山脈を越え
るときに冷えて、雪や雨結晶になって、
水力発電のもととか、秋田米、新潟米を
養う水を供給しているのであります。南
から運ばれてくる暖流のおかげで、日本
のこの狭い島で一億の人を養っているも
とです。日本の絵画、芸術なども、この
影響を受けてきている要素が、非常に大
きいのであります。

水分、エネルギーを供給する大きなも
とは黒潮のエネルギーが非常に大きい。

このエネルギーをもっと利用する方法は
ないか。波浪のエネルギーを利用する、
火山国ですら地熱のエネルギーも利用
できる。黒潮の持つ熱のエネルギーを利
用する。原子力の発電所にしましても温
水といつて、温度の高い冷却水を出す。
これをもっと利用して海面に出す前に、
温泉でもいいですが、花、果物などの植
物を養うとか、エビを飼うとか、いろい
ろ十分に活用とか、そして放射能のよ
うな害のあるものは一切出さない。この
ことに全部の人が協力していくというこ
とが大切だろうと思います。

ことしはちょっと気候が不順で、冷害
気味だと申しますが、海のほうがたいぶ
変わりつつありますが、自然の傾向から
見れば豊漁のほうに転するようすが見ら
れるのであります。こちらでも承ります
と、マイワシがだんだんあらわれている
ということがありますが、太平洋側でもそうい
うことがいわれています。

ただ、おそれることは海が汚染するこ
とです。せっかくいいまわり合わせにな
っても、海を汚しておいたら、イワシ
の子どもでも油もつれで真黒になって、
廃油なんかあまり流れるようでありま
すと、減ほされてしまいます。そういう
ふうにならぬように力を合わせていき
たい。ちょうどいま国も、環境庁をつくる
など、その方面でいろいろ努力をしてお
るのであります。実際に効果が上がら
までは安心ならぬと思ひます。

水がきれいになり、現在がよくなるこ
とを見届ける必要があります。母乳でさ
え安全でないという状態です。都会など
では特に子どもに小児ガンがふえつつあ
るといわれていますが、骨が非常に弱く
なって、ボキボキ折れるような子がふえ
ている。これがほんとうにふえてきたら
たいへんであります。そうならないよ
うに、ぜひしたいものだと思います。

(文責・編集部)

NHK
ブックス

社会医学の考え方

田中恒夫著
最新刊
東京大学教授

健康を守るのには本質的に自分自身であるということが、今日ほど強調されなければならない時代はない。
本書は社会医学者である著者が、国民の健康保持のため数多い実例をもとに、現代の医療制度、公衆衛生、
産業衛生、公営医学のあり方などを分析的・総合的に検討し、現代の社会医学のあり方をとく。 ● 360円

桃山の花鳥と風俗 障屏画の世界
武田恒夫著… 420円

庶民と旅の歴史 新城常三著… 360円

日本放送出版協会
東京都千代田区内幸町2-1-18